

---

# 【む・著】なんでだよ

ことむま！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【む・著】なんでだよ

### 【Nコード】

N3034V

### 【作者名】

ことむま！

### 【あらすじ】

お題【曖昧な二人の10の議題】の一つを使用したお話です。大人になりきれない大人のアナタへ。苦い思い出のある幼なじみと突然再開した男の戸惑いと渴望。描写はきつくありませんが、一応R15指定になっています。

なんでだよ。

ちくしょう、と唇を噛みしめる。

一瞬だけの温もりが残るそれを、血がにじむぐらいにきつく、きつく。

焦がれてやまなかった、あの艶やかな赤に触れることができたのに 俺は全くシアワセじゃなかった。

それどころか、苦すぎる後悔と後味の悪さと、どうしようもない喪失感に襲われている。

西日の差し込む自分の部屋。きつとあいつは、もうここに来ることはない。

\*

金曜、午後六時半。

珍しく定時で終わった俺は、エレベーターホールを通り抜け、まっすぐ受付のデスクへと向かった。

「お疲れ様です」コールがさざ波のように響く中、俺の視線はただ一点に固定されている。ネクタイを緩め、息を吐きながら微笑んだ。

「よう、ルミちゃん。お疲れ」

「新藤さん……お、お疲れ様です」

声をかけた途端に赤らむ頬、動揺と同時に滲む淡い期待。俺は今夜こそ応えてやるつもりだった。

四月にやってきたこの新人受付嬢ちゃんに、感じのいい微笑と挨拶だけを繰り返してきたのはひたすら警戒心を解くため。と

もちろん、狙いを定めた獲物との距離を縮めるためだ。

「きよ、今日はお早いですね。いつも残業ばかりなのに珍しい」  
薄茶の髪を耳にかけながら、ルミちゃんは上目遣いに続ける。ぱつちり二重の瞳に俺だけが映っていることと、ほんの少し媚びの浮いた微笑みを確認して、頷いてやった。

「ああ。今夜は定例の合同飲み会だからね、特別。っていつても営業部は男ばつかでむさ苦しいからさ、どう？ ルミちゃんたちも一緒に来ない？」

残り二人にもそこで笑みを見せ、あくまでも『みんな』を誘う。その言葉で、今までどこか冷ややかなものが残っていた二人の顔も緩んだ。それこそが俺の作戦なのだ。

「ええ〜？ いいんですかあ？ 私たちまでお邪魔しちゃっても」  
なんてバカっぽく喜ぶ女どもに、「もちろん、美女はみんな大歓迎」とか軽く答える俺。そこで一瞬尖る唇に気づかないわけではない。

二人の相手を適当にしつつ、さりげなくルミちゃんだけに視線を送るのがポイントだ。『大丈夫、これはお愛想で、本命は君だけだよ』的な合図である。

三者三様の思惑をうまく受け流し、了解を取り付けた俺は先に社を出て、飲み会の行われる居酒屋へと歩き出した。といっても、もちろん後でルミちゃんだけを連れ出すつもりなのだが。

プルルル、プルルル シンプル第一の着信音がスーツの内ポケットで鳴り響く。オフィスビルばかりが連なる大通りはアスファルトと車とビルの熱気で未だに昼の暑さを残している。既に始まった猛暑にうんざりとしながら、通話ボタンを押した。

「もしもし？ 卓<sup>すく</sup>う？ やっと取ってくれたあ〜。んもう、どうして最近電話くれないのよお」

バカっぽい声ですぐに誰かわかって辟易とする。顔だけで判断して失敗した例、庶務課のサユリだ。ひと月と少し前に『頂戴』してからずっと、こうしてうるさく電話してくるのだが。

「ああ、ごめんごめん。ちょっと取引先と色々あつて忙しくてさ。悪いけど今夜もこれから接待だから、また今度ね」

『ちよつとお』とまだまだ絡みたまな声を置き去りに、畳んだ携帯をポケットに突っ込んだ。こういう女にはハッキリ言つてやるのが一番の得策なのだろうが、俺は直接的なやり方が嫌いなのだ。

徐々にフェードアウトしてやれば、気づかないものも気づかざるを得ないだろう。そう結論付けるのが身勝手な論理だということも知っている俺は、またかかってきた別の電話を、今度こそ名前を確かめて出ない選択をした。こちらはサユリと違い少しは頭の働く女だから、すぐに切れてしまった。

どちらにしろ同じだ。男が電話に出ないのに、他の理由なんてあるわけがない。飽きた　それだけのこと。

『今、出ました。あとで素敵なバーにでも連れて行つて下さいね。二人で夜景が見たいです』

ルミちゃんからのメールを確認し、俺はにやけた頬を引き締める。通りすがりの、いかにも仕事のできそうな赤いスーツの女が、ちらりと俺を見たからだ。胸の膨らみを見せつけるような上着のデザインと、細すぎもせず太すぎもせず、ちょうどいい肉感の太ももを包むタイトミニ。カールがかったロングの黒髪は無造作にまとめられ、後れ毛が色気をかもし出す。

うん、今度はああいう大人の女もいいな。

気分は既にルミちゃんから別の相手へと妄想を広げている。一度デートの約束を取り付けてしまうと、半分満足してしまう自分はつくづく節操なしだと思った。年下、年上、同年　ありとあらゆる女は星の数ほどいる。うまく遊ぶコツは社会人生活二年目を過ぎて、把握した。その片鱗は大学時代から培ってきたのだ。それでもまだ満足したことは一度もなかった。全ては一夜きりの関係。それが幾度か続いたとしても、自分をそれ以上引き止められる相手にはまだ出会ったことはないし、これからも出会うことはない。確信にも近い思いをもう一度新たにする。

そんな時だった。たつた今勝手な妄想の相手にした赤いスーツの女が、向こうから近づいてきたのは。

「久しぶり、卓」

大きなサングラスをかけた女が、艶やかな唇を開く。全く見覚えはない。当然だ。いくら俺でも、こんなモデルか芸能人みたいな女にはまだ縁がなかった。

「え、つと……どこかでお会いしました？」

それでも好青年ふうを装って、俺は社会的に見えるだろう微笑みを見せる。覚えていないだけで、もしかしたらクライアント関係の女かもしれないからだった。

「やだ。わからないの？ じゃあこう言えばわかるかな。久しぶり たつくん」

笑いまじりの声からは気取った香りが消え去り、親しげなものになった。ついでに細い指がサングラスを外し、お目見えした顔は紛れもなくたつた一つの面影を示している。それが母親以外、唯一そのあだ名で俺を呼ぶ人物だと教えてくれる。

俺はたつぷり十数秒は言葉を失っていただろう。せつかく作り上げた好青年の仮面がはがれ、下から普段の俺が覗いていることにも気づかずに。

「お前……美弥か！？」

ようやくたどり着いた結論。ガラにもなく大声で叫んだ俺に、大人でモデルで最高にセクシーな女に見えた人物、美弥は破顔した。

「そつだよ、美弥だよ！ ほんつとに久しぶり……六年ぶりかなあ？ 会いたかったあ、たつくん！」

いきなり飛び込んできた美弥を、仕方なく受け止める。いつもなら役得とばかりにしつかり堪能するはずのやわらかな感触に、俺は戸惑いを隠せなかった。

「……七年ぶりだよ、バーカ」

あいかわらず計算間違いなんでしてくれる幼なじみに、無愛想に

そう答えるくらいしかできなかった。

庄野美弥<sup>しほの</sup> 真向かいの家で生まれ育ち、幼稚園も小学校も、高校までを全部同じ場所で過ごした唯一の存在。

十八の時に美弥が家を飛び出して行ってから消息も知れなかったというのに、どうして今になってこんなところで巡りあうのか。

やっきになって探した時には完全に消えてしまった姿が、なぜこんなにも手の届く場所にこうしているのか。

そりゃあ同じ東京だから、会ってもおかしくはないかもしれない。でも、大学を卒業してこっちに就職した頃の俺でさえ、既にその可能性は頭から消していた。それほどに、偶然再会する確率なんて低いはずだ。

頭に回る疑問に一応の答えをくれたのは美弥自身で、見事モデル事務所で採用され、海外での撮影を主に多忙に過ごしてきたのだという。ちょうど帰国して、仕事のオフなのだとかなんとか、俺の知らない雑誌の名前を挙げながら説明してくれる。実家からの情報で、東京で暮らしている俺のことを知り、会えればいいとは思っていたけれど本当に鉢合わせするなんて、すごい。そんな美弥の話に気のない返事をしながら、ソルティードッグの残りをあおった。喉に心地いいアルコールの感触が、もうどちらでもいいかと感じさせてくれる。

「なんか不思議…… たつくんとかうしてお酒飲んでるなんて。お互い大人になったんだね」

目元をほんのり赤く染めて、呟く美弥。三杯目に突入しても平気な俺とは裏腹に、美弥のほうは一杯をちびちび堪能しているようだ。つたが。

「……その呼び方やめるよ。今更恥ずかしい」

「なんで？ いいじゃない、たつくんはたつくんなんだから。あたしにとつてたつくんは、いつまでもたつくんなの！」

余計に連呼してくれる美弥を、人差し指を立てて黙らせる。カウ  
ンターの奥で一瞬微笑ましげな視線を送ってきたバーテンが、そっ  
と奥へ引っ込んだ。おそろくいつもの俺と違う、とても思っている  
んだろう。やっぱり他の店に連れてくればよかった。

後悔先に立たず、だ。当然のように腕を絡ませ、飲みに行こうと  
誘う美弥の笑顔をはねつけることができず、こうして飲み会をサボ  
ってこちらを選んできました。

『今どこですか？ 大丈夫ですか？ 何かあったのかなって心配し  
ています。連絡下さい』

こっそり取り出し出して見た携帯の画面には、ルミちゃんからのメー  
ル。何度目かのそれを迷った挙句に無視した。こういう場合、あと  
で落ち着いてからあれこれでちあげて素直に謝るほうがいいのは  
わかっているし、それに。ちらりと横を見る。高めのスツール  
に腰掛けた美弥は、足を綺麗に組み、まだ見かけだけで言えば『モ  
デル並みのいい女』然としている。

が、既に中味があ的美弥だとわかってしまった俺からすれば、た  
め息をつくしかない。手を出すこともできない女のしどけなく酔っ  
払った姿を見守り、なだめ、ちゃんと安全に送り届けてやらなけれ  
ばいけないのだから。それにしても どこへ？

左手どころか、右手にも指輪はない。ただ、シンプルな金のバン  
グルが一つ、左手首にはまっているだけだ。にしても、最近是指輪  
をしない場合もあるというから、まだ決め付けるわけにもいかない。  
「なあ、美弥。そろそろやめといたほうがいいんじゃないのか？

お前今どこ住んでんだよ？ 送るから……」

「やつ！ まだまだ飲むの〜！ 今夜はたっくんと再会記念なんだ  
から、もう一軒行くよ、もう一軒っ！」

すっかり盛り上がってしまったている。腕を引いて立たせようとし  
たのを振り払われ、先立って歩き出した美弥に、俺はまた嘆息した。  
「しょうがねえなあ」

それが飲み会のことなのか、ルミちゃんのことなのか、それとも



他の何かなのかわからないまま、呟く。そしてやけくそで繰り出した夜の街で、俺と美弥は三軒も店を梯子してしまったのだった。

ブルブル、ブルブル、ブルブル……また携帯が鳴っている。ああ、何軒目かの店でもうマナーモードにしたから、震えているのだ。

相手は誰だろう。たぶんルミちゃんだ。そうだ、約束を放り出した言い訳を、何か上手い言い訳をして機嫌をとらなければ。そこまでは考えるのに、ガンガン痛む頭が邪魔をする。

普段はザルな俺も、カクテル、ビール、日本酒にワイン、ウイスキーと、さすがにチャンポンして飲みすぎた。途中から前後不覚になつて、それから？

誰と、どうしたのだっけ、と記憶を手繰り寄せようとしていた俺の耳に、カチャリ、と携帯を開く音が聞こえた。

「着信、ルミ。わあ、十回も入ってるよ。それからメールも……ねえ、この子と昨日デートの予定だったの？」

あくまで無邪気な声。その持ち主を思い出した途端、はっと飛び起きた。腹の部分から薄い布団が落ち、生まれたままの姿でいる自分に気づき愕然とする。極めつけに、毒々しい色合いの室内は間違いないくさうという意図で作られたホテルで。

「うわあっ！ お、お前……美弥っ!？」

ソファに腰掛け、俺の携帯を見ている女が、昨日再会したばかりの幼なじみだとわかった俺の驚愕といったらもう。今までの人生で初めての事態だった。

しかも美弥は、胸の谷間もあらわなバスローブだけを身につけている。あわてて引き寄せた布団で前を隠すと、ぱっちり瞬いた瞳が細く笑みを宿した。

「何やってんの、今更。昨日何回もヤツたくせに」

「ヤツ……はあっ!？」

素っ頓狂な俺の叫び声にくすくす笑い、美弥はするりとローブを

脱いだ。即座に目を逸らす俺の隣で堂々と着替えを終えて、鏡台に向かう。視界の隅で見えた素肌よりも、口紅を塗りなおす仕草のほうがかたると艶かしく見えて、心臓が静まらなかった。

「今日は仕事だからもう行かなきゃ。じゃあね、たつくん。よかつたらまた連絡して?」

言つて、赤い爪で弾いた名刺。そこには美弥の名前と、モデル事務所らしいカタカナと携帯電話の番号。

何が何だかわからないうちにドアは閉まり、取り残された俺は素っ裸のままこれ以上ないくらいに取り乱した。

嘘だ、嘘だ、嘘だ　俺が『美弥』とヤツただって?

そんなこと、天地がひっくり返ったつてあるわけではない。だって美弥と俺は、あの一度きり　たった一度かされるようなキスを交わしてから、顔も合わせられなくなった関係だったのに。

いや、交わしたんじゃない。俺が無理やり奪ったんだ。もうずっと前から女として見ていた美弥に、触れたくて仕方なくて。半分ヤケになって五センチの距離を縮めた。

そしたら美弥は何と言った?　七年も前の記憶なのに、ありありと蘇る。

『たつくんのバカ……!　だいつきらい!』

吐き捨てるような涙声か、俺の搾り出した勇気も熱情も何もかもを粉々に砕いた。

あの日、夕日が照らし出す俺の部屋。外では蝉がわんさか鳴いていて、一緒に夏休みの宿題をするのだとか言つて、いつものように美弥が押しかけて。

それがいつのまにか恋愛相談に変わっていた。当時、美弥には好きな男がいて、バイト先の大学生で、入ったばかりの自分に優しくしてくれるのだと有頂天になっていた。

上っ面で始まり、簡単に終わる。美弥の片思いは何度もあったこ

とだったのに、なぜかその時だけはそいつを殺したくなるくらい腹が立った。キスされそうになったのだ、と美弥が言ったからだっただかもしれない。休憩時間に年下の高校生に手を出そうとする。そんな男がまともな奴とは思えなかったし、それに　ただ、ムカついてたまらなかつた。

物心ついた時からそばにいるこの俺にさえできないことを、いいかげんな男に先を越され、しかもそんなことで喜んでいる美弥が許せなかつた。

いつか、とっておきのシチュエーションで告げようとしていた想いは、見事に焦げ付いた胸の穴から噴き出して、爆発した。

『それで、美弥はどうしてたんだ？』

聞いた俺の声が少し低かつたことも、目つきに剣呑なものが秘められていたことも、きつと美弥は気づかなかつたのだろう。ぼんわりした夢見心地の顔で『こうやって、ただじつと……』って空中に顔を突き出して、目を閉じた。その瞬間に奪ってやったのだ、焦がれてやまなかつた唇を　。

想像通り、いやそれ以上にやわらかくて、無垢で、あつたかくて一瞬で俺の心臓は驚づかみにされ、初めてのキスに夢中になった。もつともつと、こいつを知りたい。抱きしめて、俺のものにして、誰にも渡したくない。そんな強烈な欲求が体の奥から込み上げて、実行に移そうとした。といつても、かすただけのキスの後、抱きしめようとしただけだったが。

今からすれば信じられないくらいの純情。でも当時の俺はそんなことでも震えていた。美弥の片思いも嫌な男も何もかも忘れて、ずっとずっと抱えてきた想いを伝えたかつた。

それを　あいつは思いきり拒絶したんだ。ボロボロ涙を流して、突き飛ばす、という形で。

衝撃は何週間も残った。俺も美弥もそれきり口を聞かず、顔も合わせず、学校で会っても話しかけもせず、そのまま卒業した。学校でもわりとモテていた容姿を生かすためか、モデルだか芸能人だか

を目指して上京したと親から聞いた。あとは、薄情なものだ。それきり、七年間が経った。

なのに。あれほど越えられなかった壁を、酒の勢いで？ しかも何度も……？

「ありえねーっ！！」

いきなり叫んでしまった俺は、周囲に人気がないことを確かめた。会社の屋上、言わずと知れた隠れ喫煙スペースだ。社内にも設置されているそこはせまつ苦しいのが嫌で、時々こうしてやってくる。心配した人影はなく、ひっそり置かれたベンチだけが俺の視界に入った。飲み終えたコーヒートの缶に吸殻を落とす。いけないとわかっていてもついやってしまう癖だ。

「はあ……ほんつとにマジかよ……」

無意識に取り出した携帯を眺める。そこには新規で登録した美弥の名前と電話番号。捨ててしまおうと思っていた名刺も、結局スーツのポケットに入れっぱなしだ。今は暑すぎてベンチに放り投げたそれを睨みつけ、髪をがしがしと掻き乱す。

「そっ、そっだ。美弥は置いといて、ルミちゃんだ、ルミちゃん。今度こそは……！」

先日的一件でしばらくは目も合わせてくれなかった彼女だが、なんとかまたメールをくれるまでになった。クライアントとトラブルがあつて夜通しそのフォローに回っていたのだという言い訳を、信じてくれたらしかった。考えれば考えるほどの混乱から逃げるため、と我ながら思えなくもなかったが、俺はやっと取り付けたルミちゃんとの約束に頭を切り替えることにした。

念のため美弥と行った店を避け、タクシーに乗り込んだ俺は、ルミちゃんの手を握っていた。

予想通りすべすべした感触。これは肌もしっとり持ち肌に違いない。とふしだらな想像に及びながらも、爽やかな顔を保つ俺。

「ごめんね、この前は本当に……今度こそゆっくり飲もう。夜景、見たいって言うってただろ？ Sホテルの最上階にあるバー。あそこなら絶対満足すると思うよ」

「わあ、嬉しい……でも新藤さん、そのバー他の女性と行ったことあるんでしょう？ だから色々知ってるの？」

小さめの唇を尖らして、少しヤキモチを焼くルミちゃん。今はすごく可愛らしいと思えるその仕草が、抱いた後にはきつと鬱陶しくなることも承知の上で、俺は微笑んだ。

「バカだな、クライアントと行っただけだよ。俺はそんなに器用じゃない。こうやって誘うのは 本気で好きな人だけだ」

我ながら、歯が浮くような台詞。他の男が言っているのを聞いたら大笑いするだろうそれを、真剣な顔で口にしてみせる。それもこれも、全ては最高の一夜のためだ。

「ねえ、新藤さん 今夜は、どこかに消えちゃわないでね？ 私、ずっとそばにいたい……」

恥ずかしそうに囁くルミちゃん。こんなことを言えるあたり、実はこの女も相当なものかもしれない、と思いつながらも頷く。

ところが、その約束は一分と立たずに破られるはめになった。信号で止まったタクシーの運転手が、「なんだ、事故か。まったく」と舌打ちすらしそうな声音で呟いて。

渋滞しないうちにさっさと通り抜けてくれ、なんて薄情なことを考えていた俺は、窓の外で赤いスポーツカーから降り立つ女を見てしまったのだ。

「ちよつと……どこ見て運転してんのよ！」

おそらく追突したのは後ろの車。若い男のほうに堂々と文句を言っているその顔は、ようやく忘れかけていた美弥のものだった。

「まあ、怖い。ねえ？ 新藤さん」

「おお、姉ちゃん。イキがいいねえ。でも相手もチンピラみたいだけだな……大丈夫かね」

二人ともがそれぞれ話しかけてくるが、俺の耳には入らなかった。

今にもチンピラとケンカになりそうな美弥を見て、黙って通り過ぎ  
てしまいたいのに　気づけばドアを開けていた。

「ごめん、ルミちゃん。これで払っというて！　埋め合わせは今度

」

「ええっ？　し、新藤さん!？」

今まで親密にくつついていた女の子をタクシーに置き去り。しか  
も二度のドタキャン。なんて奴だ。そう思うけれど、我慢できない。  
そうだ、美弥は　昔から変なところで負けん気が強くて、上級  
生にでも何でも向かっていくところがあつたから。

生意気な女だと降ってくる拳からあいつを守るのは、俺の役目だ  
つたのだ。

「美弥!」

しばらくは留まっていたタクシーが、後ろから追い立てられて発  
車したのが見えた。屈辱か混乱か　ともかく今度こそルミは許し  
てくれないだろう。

それでも叫んだ俺の声で、チンピラと美弥が同時に振り向いた。

で、結局こうなるわけか。

保険会社への電話やら仲裁やらを終えた後の感想。美弥と並んで  
酒を飲み、肩を落としながらのものだ。でも場所はオシャレなバー  
でも話題の居酒屋でもない。言ってみれば場末の、オヤジたちが集  
まる飲み屋だ。

意外なことに選んだのは美弥で、こんなところで飲んでみたかつ  
たのだと上機嫌に笑った。

引っ張って連れて来られた俺にしろ、女連れでなければこういう  
雰囲気も嫌いじゃないから、いつの間にかほっと一息ついていた。

串焼き、日本酒、スルメ　オヤジ同士の仕事の愚痴に、その場  
限りの気安さ。どうやって口説き落とすかを考えないで済む相手と  
二人きりで飲むのは、気楽だった。

っていつても、俺、こいつを抱いたんだよな。

記憶の奥底に封じ込めることで何とかバランスを保っていた心。それがまた急速に混乱し始める。いやいやいや、嘘だろ……？

長い髪も色気が立ち上るうなじも、全く触れた覚えなんてない。ましてや今日も今日とてセクシーな黒ワンピースを着込んだ体なんて、滅相もないという感じだ。

制服を着ていた高校の頃までのイメージしかない俺にとって、今の美弥は別人といてもいいくらいに違った。

「よし、もう一軒行こう、たつくん！」

前回以上にハイピッチで冷酒を飲んでいた美弥が、ご機嫌に腕を突き上げた。金のバンブルがからんと音を立てる。手首の裏、刻まれている文字がちらりとだけ見えて、俺はその腕を掴んだ。

「to miya from kei 何だよこれ」

もつと言えば、愛を込めて、みたいな文言が英語で続いていたのだが、そこまで読み上げたくはなかった。酔いに潤んでいた美弥の瞳が、わずかに動揺を見せる。それでも動じない分だけ大人になったのか何なのか、美弥は腕を引つ込めた。

「何ってそのまま。もらったのよ」

「こんなの……男からだろ？ お前はこういうモンもらう奴がいながら、俺と」

さすがにわいわい賑やかな飲み屋ではそこまでしか言えず、口をつぐむ。唇を噛んだのは久しぶりだった。

「そつ、そんなのたつくんだって一緒でしょ？ ルミちゃんだか何だか、女の子といっぱい付き合ってるみたいだし」

「それは……」

確かに矛先を向けられては言い訳できる立場でもない。でも待てよ 何もこいつと俺は付き合ってるわけでも、好きだと言い合ったわけでもない。単なる、昔の幼なじみって間柄しかないはずで。

同時に状況を理解したのか、気まずい沈黙が訪れる。苦い記憶が蘇ってきてそうで、頭を振って席を立った。

「俺、今日は帰るよ。タクシー捕まえてやるからお前も……」  
「結婚するの！」

黙って下を向いていた美弥が、何かを思い切ったかのように声を上げる。狭い店内では自然と注目が集まって、俺たち二人は浮いていた。が、突然の告白に頭が真っ白になっていた俺は、そんなことを気にする余裕もなかった。

「結婚……？」

「そう。だから、その前にたっくんに会いに来たの！ いいじゃない。後くされも面倒なこともなくて……もうたっくんの前には現れないから」

だから　ねえ、と震える声が耳元で告げた言葉に、俺は息を呑む。

女にしては背が高い美弥だが、百八十五を越える俺に近づくためには必然的に背伸びをするはめになって。首に手を回し、しがみつくように抱きついてきた美弥を、引き剥がすことができなかった。

抱いて。

もう一度だけ、と懇願されたその声は甘く、逆らえない魅力に満ちていた。

そこがオヤジたちのオアシスでさえなければ、そのまま背中の上アスナーを下ろしていたかもしれない。それほどに、鬱屈としていた腹の底に火がついた瞬間だった。

有無を言わず店から引きずり出して、その辺のラブホを通り過ぎ、一流ホテルの部屋を取った。一晚には高すぎる豪華な部屋で、滅茶苦茶にしてやりたい気分だったのだ。

強引に引っ張ってきた俺に、美弥は文句の一つも言わなかった。それどころか、シャワーも浴びずに服を脱がされても、ただ熱を帯びた声で俺の名前を呼び続ける。

たっくん、と幼い響きで言われるたび、余計に頭が麻痺した。べ



ツドの上、上質なシーツの上に押し倒した美弥の顔が、あの頃のままの愛しさを蘇らせたのだ。

震える指で背中の中のホックを外し、汗の浮かぶ素肌に触れる。その瞬間に確信した。あの時、俺は絶対に抱いていない。こんな風にやわらかで滑らかで、しっとり吸い付いてくるような肌に触れたことなんて、今までにないと本能でわかった。掌と指の先で確かめる感触は、この世のものとも思えぬくらいに優しく、俺は思った。

なんでだよ。

なんで今更、こんなことに気づくんだ。なんで、こうして取り返しがつかなくなっただけから現れる？

見知らぬ男に送られたバングル。結婚の約束。そんな残酷な現実を突きつけて、なおも俺に抱かれようとする？

俺が女なら、あふれる感情のままにきつと泣いていた。込み上げてくる熱いものを必死で抑え付けて、代わりのように顔を近づけた。美弥の瞳から、透明な雫が零れる。

「たつくん……」

言葉にできないものを宿した声に、体中が熱くなる。熱くて、どうしようもできないくらいに熱くて、それと同時に心の底から凍っていく。

なんでだよ。

こんなことになってから、目の前の女を誰にも渡したくないことに、いや、ずっと前から渡したくなかったことに気づかされるなんて。

「美弥」

息を吐き、ゆっくりと顔を近づける。瞳を閉じた愛しい女に口付ける。こんなこと、もう何回も繰り返してきたはずなのに。

七年ぶりのキスは、どんな媚薬も叶わないくらいに甘く、そして苦かった。

目が覚めると、美弥は消えていた。

それから数日の間、呆けたようになっていた俺は、女の誘いを全て無視した。わざとではない。携帯に出る気力もなかったのだ。

仕事だけはいつもより熱心にこなした。そうすることで落ち着く、というだけのことだったのだが。受付に座るルミの顔を見ることもせず、通り過ぎる。そんな俺にあからさまに嫌な顔をして、受付嬢たちは陰口を叩いているようだった。それでも俺には、何の感情も浮かばなかった。

仕事の合間、ぼつかりと空いた空白の時間にはいつも屋上へやってきて、ひたすらタバコを吸い続けた。そうして、いつものようにコーヒーの缶に吸殻を落とそうとした時、飲み口の隙間に押し込まれた、小さなメモ用紙を見つけた。開いてみると社内で使う付箋で、綺麗な文字で一行だけ書かれていた内容に、俺は目を見開いた。

『美弥さんのことで、お話があります　ルミ』

意外な相手から出されたその名に、ぼんやりとしていた脳がフラッシュバックさせる記憶。それは全て美弥の笑顔で、幼い頃から高校までの思い出で　最後に聞いた切なげな声だった。

好きだよ、たつくん。

そう何度も何度も囁いて、かすれる声で呻いて、俺の歯止めを外した声。ベッドの中だから言っているに違いないと、壊れた頭で、口で、俺も同じ言葉を囁いた。

でも、それこそが真実だったのだ。俺の中の想いは、七年を経ても全く色あせていなかった。

だから何だ。今更、俺から去って他の男の元へ行く女を、これ以上どうすることもできない。

そう思うのに、仕事を終えた俺の足は、無意識に受付へと向かっていた。ただ前に立っただけでルミは立ち上がり、黙って外を指差した。

付いて来い、という意図にそのまま従い、どこかのビルの半地下

人気がないティールームへ入った。

飲む気のないアイスコーヒーを頼んで、ルミが口を開くのを待つ。泣きそうな瞳でしばらく俺を見つめた後、ルミは意を決したように微笑んだ。そして、いつのまにか抱えていたらしい茶封筒を差し出した。

「それが、庄野美弥さんの情報です」と短く言われ、封筒の中身を確認した。血相を変えた俺に、ルミは少し悲しそうな顔で頷く。

「会社では秘密にしてるんですけど、私の父親が調査事務所やって……まあ、いわゆる興信所なんですけど」

そのツテで調べてもらったのだと、勝手な行いを謝罪する。そんな言葉よりも何よりも、俺には書類に書かれた文章しか飛び込んでこなかった。

「これ 本当？」

「……はい。疑うんなら、父親の仕事も全部会社でバラしてもらってもいいです」

真剣な瞳。営業の仕事柄、相手が嘘をついていそうな時は大体わかる。けれど、ルミの表情は断固として潔いものだった。

「本当は この封筒渡して、あの人に失望してくれたらいいって、思っていました」

「え……」

「でも今の新藤さん、やっぱり見てられないから」

あきらめました、と寂しそうな微笑を見せるルミの顔。真正面に座りながら、見ていることができなかった。

「……ごめん」

するり、と口から出た。真正銘の謝罪。そう、謝るのは俺のほうだった。こんな勝手な男に協力してくれたルミに感謝して、俺はティールームを飛び出していた。

さっきみたいに、タバコを吸ってる俺の背後へそうっと近づいて、

ジャケットの内ポケットを見たのだとルミは言った。

そこにあつた美弥の名刺を見て、あの時事故を起こした女だと確信したらしい。それも当然の推論だろう、他の女をほつたらかしてタクシーから降りたのだから。

持ってきた書類には、高校へ出てからの美弥がどこで何をしていたのか。どんな風に過ごしていたのかが、参考写真と共に詳細に記されてあつた。

ぐしゃりと丸めたそれをポケットに突っ込んで、俺はタクシーを呼び寄せる。向かう先は、接待でさえ行くことのない寂れた夜の街。釣りをもらうのも忘れてドアを閉め、降り立った足でまっすぐ飛び込んだのは、古びた、小さなスナックだった。

「た……！」

呼びかけた名前は、二人の間であえなく落ちて。戸惑いも驚愕も何もかもを無視して、細い腕を引く。

「あとでこいつの稼ぎ分、きっちり払いますから」

何事かと顔を見合わせるママと客たちに言い置いて、ついでに自分の名刺までカウンターに残して、俺は美弥を連れ出した。歩幅いっぱいには歩く俺に付いてこられず、よろめくように歩く。美弥の顎までの明るい茶髪が、子供のように揺れた。

「なんで……どうして？ たっくん……」

住宅街にぼつんとある公園のベンチで、やっと手を離れた俺への問い。下がった眉と混乱しきつた泣き顔に、不思議と笑みが沸いた。「お前、泣き虫は変わってねえな」

肩に毛虫が落ちて泣いていた、幼稚園の頃のままだ。両手で絞めればポキリと折れてしまいそうな首も、肩のラインも、腰も、作りあげた『素晴らしいスタイル以外は全て、昔を彷彿とさせる美弥だ。』

「なんでは俺の台詞なんだよ、このヤロウ」

半分以上本気で怒鳴りつけた。びくつと震える美弥に、深いため息をお見舞いしてやった。

一体何から話せばいいのか、俺にもよくわからない。けれどただ自分がひどくほっとして、どうやら嬉しくてたまらないらしいことだけはわかった。

「モデルやってるなんて、なんでそんな嘘ついた？ 結婚するとか全部……くだらねえこと言ったのはなんでだよ」

そこまでして俺に抱かれるために。そのためだけに現れたのか、と言えない気持ちを含めた視線に、美弥はしゃくりあげたのだ。

「だって……言えなかったんだもん！ モデルになるとか言って上京して、全然夢なんて叶えられなくて……今は水商売だとか。そんなのどこにでもいるバカな女じゃない。誰に知られても、たっくんだけに知られたくなかった」

雑誌も海外での仕事も、何かも嘘八百。いや、一度はモデル事務所に入ったのは事実だったらしいが、それは水着や下着でグラビアまがいの仕事ばかりさせるところで。

やめた後はバイトを点々として、結局はキャバクラやスナックを選ぶしかなかった。そんなありふれた女の失敗談。

だからこそ俺にはもちろん、親にさえも言わなかったのだろう。東京でOLに落ち着いたと言い訳して、毎月仕送りしていることまで調査には上がっていた。

「バカでいいんだよ、お前は」

モデルになるために豊胸手術までして、必死に完成させた外見だけは守っていた。そんな見栄っ張りで愚かな女が、俺は愛しくてたまらなかった。バカでも何でもいい。そのままの美弥ならば。

そんな内心は無愛想な口調にはこもらなかったらしく、涙に濡れた美弥の瞳がキツと見上げてくる。

「どうしてよ　！ たっくん、いつも言ってたじゃない。バカな女は嫌いだって。俺が恋人にするなら、大人でセクシーな女にするって……だからあたし……っ」

隣に座った俺の胸を拳で叩く。美弥の手首には金のバンブルが輝いている。

「結婚なんてしないんだろ？」

調査の結果、現在恋人はなし　その言葉だけを信じて、俺は聞いた。それでもいざ金の光を見てしまうと足はすくみ、あの時の喪失感が胸に蘇りそうになる。

一か八かの賭けにも似た気分で答えを待つ俺に、美弥は案外素直に降参した。全て知られたというあきらめが、ゆがんだ顔から透けて見える。

「しないよ……そんなの」

「じゃあなんで　！」

さすがに声を荒げかけた瞬間、美弥が被せるように何かを叫んだ。聞き取れなかった言葉は、もう一度消え入りそうな声になって耳に届く。

「好き、だったんだもん……たっくんのが、ずっと、ずっと忘れられなかったんだもんっ！」

癩癩を起こした子供みたいに、泣き叫んだ美弥。あれほど隙のない大人な女に成長したと思えた顔が、今は化粧も崩れてぐちゃぐちゃだ。それなのに　俺の目には今まで出会った中で、一番の美女に見えた。胸の奥、俺の存在全てが叫んでいる。一つになったあの時よりも、今この瞬間が最高に幸福だと感じた。

「一度だけでもいいから、たっくんの女になりたかった。あたしは本当に成功したモデルで、大人の女で、幸せで……そんな夢を、たっくんの腕の中で見たかったの。一度で終わらせなきゃ、あたしバカだからずるずる夢見ちゃう。もしかしたら、こんなあたしでも許してくれるんじゃないかって……たっくんのそばに、また戻ってもいいんじゃないかって。だから　」

まだ何か叫ぼうとしている口を、無理やりキスで塞いだ。抵抗する手首をしっかりと捕まえて、動かなくなったら力いっぱい抱きしめて　貪るように唇を味わった。

あの頃の俺が戻ってきたかのように、ぎこちなく、それでいて最高に甘いキスだった。

頼むから、もうどこへも行かないでくれ。熱に浮かされたような俺の懇願に、美弥は崩れるように身を預けた。

\*

成功したモデルが聞いて呆れるような額の借金。全部を肩代わりする交換条件として、水商売から足を洗わせた。

稼ぎなんて少なくていい。だから自分が胸張ってやれる仕事を見つけてこい。そう言った数日後、美弥は思いもかけない職場を見つけてきた。

近所の児童養護施設で職員補助のアルバイト。モデルに憧れる前は、子供に関わる仕事がしたいと思っていたのだと、照れたように笑って。

バイトの傍ら、保育士の資格を取るため、通信教育で勉強を始めた。土日なんてその施設へボランティアに行ってしまうほどの熱心さだ。

そつえば昔から、世話好きな面があったつけ、とか何とか思いつきながら、俺はガラステーブルに突っ伏したまま寝ている美弥を抱き上げる。

「ん……たつくん？」

頬をほんのりピンク色に染めた寝顔も、無邪気な態度も昔のまま。それが外見とのギャップを生み出して、今では魅力になっていることも知らず、美弥は自分を恥じている。

俺が適当な方便で言ったことを今でも信じて、子供な自分の性格を直したいと言い募る。面白いから、可愛いと言ってやらない俺にも原因があるのだが。

でも やっぱりしばらくは黙っていよう、と再度決意を固める。それもこれも全部、あの拒絶が単に照れゆえのことだったとか、片思いの話も恋の相談も、何もかも俺にヤキモチを焼かせるためだけの嘘だった。なんていう今明かされた高校時代の新事実にも、俺がまだ怒っているせいだ。

それならそれで、なんで言ってくれなかったのか。しなくてもいい回り道をするはめになったのはお前も悪いとか、本当はあれこれ責めてやりたかった。

でもさすがにこの年でそれを言うには、プライドが邪魔をする。それに、美弥なりの精一杯のアピールにもずっと無反応だった（と美弥は受け取っていた）俺がいきなりキスしたのは、悪趣味にからかっただけなのだと思解していたらしいから。

仕方ない気がするような……やっぱりもつたいたいような。

どちらかと言えば、後者に決まっている。ずっと前に実っていたはずの恋なのだ。だから俺は、意地悪く耳元で囁くことにした。

「俺の家なんだから、俺に決まってるんだろ？ それともお前、他に抱き上げられるような相手がいるのかよ」

隠しもしない独占欲は、唇を奪うことで少しだけ発散させる。もちろん、こいつにそんな時間も器用さもないことぐらい熟知していることは、教えてやらないのだ。

「いないよ……いるわけじゃない。あたしにはたっくんだけ。今も、昔も、ずーっと……」

夢うつつの美弥は、余計に素直だ。その答えに満足して、ベッドに降ろす。エアコンの効いた室内では風邪を引きかねないから、薄い布団をかける。

俺のするままに任せ というよりも既に寝入ってしまった美弥を、起きていたら見せられないほどに緩んだ笑みで見つめた。

眠る美弥の手首には、もうあのバンゲルもない。といつても、数年前に少しだけ付き合っていた彼にもらっただけのものだというから、嫉妬することはない。



というのはもちろん建前で、あの夜すぐに捨てさせた。いつか困ったら質屋に売るつもりだったのだ、という情けない美弥の言葉は、俺が一切面倒を見ると言っただけで流した。

代わりにはめられた左手の薬指のリング。まだシルバーのそれが、本物の宝石に変わる日も、そう遠くないだろう。

遠回りにねじれ道　重なり合わなかった二人の道は、今やつとつながったのだ。

「たっくん……」

幸せそうな寝言をもらす艶やかな唇に、俺は吸い寄せられるようにキスを落とした。

F i n .

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。「ことむま!」「EDによる初めての作品、楽しんでいただけていたら幸いです。といっても、これはあくまでも中の人、「む」による一例ということで、グループならではの別々の味わいをお楽しみいただけたらと思います。感想などいただけたら非常に喜びます。

ことむま! 「む」拝

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3034v/>

---

【む・著】なんでだよ

2011年7月31日10時58分発行